

---

# お嬢様と誘拐犯

磯崎ロマネ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お嬢様と誘拐犯

### 【コード】

N8989P

### 【作者名】

磯崎ロマネ

### 【あらすじ】

ある日突然誘拐された領主の娘パトリシア。誘拐犯はまだ若い青年でどうやら事情がある様子。彼女は無事に帰れるのか？

## 序

よく晴れた青空の下。

ある大きなお屋敷の庭には沢山の白い花が風に揺れ、その間を黄色い蝶がひらひらと飛んでいる。

初夏の庭木は若葉が茂り、涼しそうな影を地面に落す下で、母親と娘らしき少女が花を摘んでいた。

「ねえ、おかあさま！お花とってもきれいね」

「ええ、そうね。これはデイジーというのよ」

「でいじー」

「そう、デイジーよ。とてもいい香りね」

少女は顔に花をくつつけて匂いを嗅ぐ。

「ほんとうだあゝおかあさまみたい」

少女は母が大好きだった。

きらきらして優しく、まるでおひさまのような本当に自慢の母だった。

ふふっ、と笑うと母親はドレスの裾を揺らし立ち上がる。

「さあ、お部屋に飾りましょうか」

「うん！」

2人は手をつないで屋敷の中へ入っていく。  
麗らかな午後の陽光が庭を照らしていた。

ずっとこの優しい時間が続いてほしかったのに。

目が覚めると知らない場所にいた。

暗く低い天井、見たこともない粗末な椅子とテーブル。木造の小  
屋の小さな窓からは、今にも沈もうとしている夕日が針葉樹を赤く  
照らしていた。

「ここは・・・？何よ、これ・・・」

彼女は堅いベッドに寝かされていた。

起き上ろうとしたが手首と足は縛られており身動きが取れず、彼  
女パトリシア・クレイトンはパニックになった。

どうしてこのようなことになったのか、さっぱり分からない。

少し離れたところに彼女の侍女が眠っていた。

彼女は侍女のエミリー、パトリシアの世話係である。

エミリーも手足を縛られ動けないのだろうか。

「ちよつと、エミリー！起きて！」

「ん、んゝ…なんですか？お嬢様」

「なんです？じゃないわよ！これはどういふことなのか説明なさい  
！」

「え、これ？…あ、動けない。あらゝどうしてかしらゝ？」

「どうしてかしら？…って…まったくのんきなんだから！」

いつもこの侍女はのんびりとしていた。

言葉が田舎訛りでさえない眼鏡顔に三つ編みを垂らし、マイペー  
ス。そういうところがパトリシアの癪にさわる。

対するパトリシアは母譲りの金髪に蒼い眼。15歳だが大人びて  
いるせいか、可憐な美しさで他の貴族令嬢の中でも劣らず輝いてい  
た。

「あ、そういうえば馬車が襲われたんだっけか。たいへんだ〜わたす  
たち誘拐されてしまったんだかね〜？」

「なんですって!?!？」

「そういうえば、今日は街へ出かけたのだった。」

帽子や服を注文して、おいしいと評判のスイーツ屋によって馬車  
に乗り、心身ともに満足したせいか帰る途中でパトリシアは寝てし  
まったらしく、気づいたらこの状況。

「全然気付かなかったわ。寝ていたのね私」

「んだ。馬車が止まったと思ったら、いぎなり黒い布で顔隠した輩  
が押し入ってきて、ハンカチを口にあてられて…そこから記憶がね  
えだよ」

「そう…というかあなた。訛りすぎよ、気をつけなさいな」

「す、すみません。お嬢様」

驚いたり興奮すると訛りが強くでる。あまりに訛られると令嬢付  
きの侍女として品位が問われる為、日ごろから気をつけるよう言っ  
ていた。

「こんな時に品位も何もないのだが。」

「まあ、いいわ。それより、これからどうしようかしら」

「どうしましょう? 私もお嬢様も動けないですし」

手足を縛られてしまつては動けないし、逃げようがない。

こうなつたら取るべき行動は一つ。

「助けて！誰か！」

大声で叫ぶ。

「誰かいないの！？」

自分がなぜこのような目に合わなくてはいけないのか、恐怖と怒りが込み上げる。

「私をこんな目に合わせて、ただじゃおかないから！」

せいっぱいの声で叫んだとき、

「うるさいな。静かにしろ」

一人の男が小屋に入ってくる。

見た感じ、ひよる長いどこにでもいそうな平凡な男だ。髪も目も茶色で背は割と高く、歳はパトリシアよりも少し上のようだ。

まさかこの男が二人を誘拐したというのだろうか？

このように平凡で若い男が誘拐犯には見えない。

「あなたが私たちを誘拐したの？」

「そうだよ。だが残念ながら俺たち、だ。逃げられると思うなよ」  
「どうやらこの男以外にも複数犯人がいるようである。」

例え隙を突いて逃げたとしても、仲間がいれば再度捕まる可能性が高い。

「平民の分際で私に命令しないでちょうだい。それにこんなことして、ただで済むと思わないことね！当然私のお父様が誰かは知っているわよね？」

パトリシアの父は領主であり、もちろんこの辺りの民で逆らえるものなどいない。

「まさか！知らない訳ないだろう？あんなだから攫ったんだよ」

男の様子からして計画的な誘拐なのだろう。それ故脅しは利かなそうだ。

しかし、領主の令嬢に対してなんとという不敬な口のきき方だろう。誘拐犯だろうがなんだろうが、パトリシアに対して命令口調で話すとは。今まで召使にかしずかれて生きてきた彼女はイライラとした。そこで空気の読めないエミリーがおずおずと、

「あの〜つまり、私たちはやっぱり誘拐されてしまったんですね。  
お嬢様、ここはおとなしく旦那さまの迎えを待った方がいいんじゃない

ないですか？」

「おだまりなさい。こんな弱そうな男に捕まるなんて我慢が出来ないのよ。まあ、お父様がそのうちに迎えに来てくださるでしょうから、仕方なくここで待つわ。それにしても、目的は何かしら？貧乏人はやっぱりお金が目当てなんでしょう！」

彼女は自身の身分が上だと分かせてやらなければ気が済まないらしく、平民が貴族に盾突くなどはまったくおかしい話だというように笑った。

「誰のせいだ…。まったく、何も知らないんだなあんだ」

「なんですって?!」

男は憐れむような目でパトリシアを見て言った。

不意に男はパトリシアに近寄り顔を覗き込むと



「哀れだな」

「なっ、私何が知らないっていうの?!あなたこそ知らないんじゃない?私に貴族なのよ、平民のあなたが不敬を働けば罰することもできるわ!」

男はため息をつき、やれやれという仕草をした。

「せいぜいお父様が迎えに来るまでおとなしくしてるよ」

男はそういうとパトリシアを背にしてエミリーに向きなおり、

「お前にはやつてもらうことがある。ついてこい」

エミリーの足首に巻かれた縄を切って立たせ、2人はパトリシアを残し出て行ってしまった。

「なんですって!?!ちよつと待ちなさいよ!言うだけ言って立ち去るなんて許さないわよ!?!」

パトリシアの叫びは小屋に寂しく響いた。

はぁ、とため息をつく。

これで何回目だろうか。一人になり、怒りが収まると溜息が止まらなかった。

理由は先ほど大口を叩いてしまったと後悔していたから。

勢いでお父様をおとなしく待つなどと言ったが、パトリシアと父親は不仲だ。

いや、不仲というよりは父親の方がパトリシアを避けている。

父親は昔は優しく、母親と彼女を愛してくれていた。

原因はパトリシアにも分らないが、きつと父親は迎えには来ないだろう。

私のことなどもう気にかけてはくれない。お父様はシルヴィアさえいればいいのだから。

シルヴィアとは父親の後妻だ。

母親が亡くなった後にクレイトン家へ嫁いできた。

母親と同じくらいの歳で美しいが冷たい感じで、数えるほどしか会話したことがない。パトリシアは彼女と仲良くする気になれなかった。

父親に避けられているのに、後妻と仲良くなるなど馬鹿げているではないか。

シルヴィアがお父様を私から奪ったのだと、孤独になった幼い彼女はそう思わずにはいられなかった。

「入るぞ」

こちらの了解も得ずに扉をあけ、先ほどの男が現れた。

「あなた一人？エミリーはどうしたの」

「どうやら彼一人で戻ってきたらしい。」

男はパトリシアの近くに椅子を持ってくると背もたれを前に座った。

「さあね、俺の知ったことじゃない。そんなに心配か？」

「べ、別に？！侍女のくせに主人を一人にするなんて生意気なのよ」

男はくくつと笑って

「あんたかわいくねーな。誘拐されたんだからもう少ししおらしくできないのか」

「ふん、うるさいわね。それより、この縄を解いてくれる？さっき

からくいこんで痛いし、だんだん痺れてきたわ」  
辛い、というように縛られた手足をもぞもぞと動かす。

男はうーん、と考えるしぐさをしたが首を振る。

「ダメだ。お前みたい怖いもの知らずの女は逃げそうだし」

「じゃあ、足だけでもいいから。手が使えなければ何もできないわ」  
男はまあいいか、と言って足の縄を外した。

その瞬間、パトリシアの足が男を蹴る。

「痛っ」

足蹴りは大した力でないが、男はバランスを崩して椅子に頭をぶつけた。

「あーら、ごめんあそばせ！勝手に足が動いてしまったわ！私を馬鹿にしたから罰があたったのね」

「なんてお嬢様だ。前言撤回、縛りなおす」

男は打った頭をさすり、縄を持ってまた縛ろうとする。しかし今度は意識があるおかげかパトリシアは足をばたつかせて暴れだす。

「おとなしくしろっ」

「嫌ですわ、レディの足を縛ろうだなんて紳士として恥ずかしくないのでかしら？」

「くっ、もういい。縛らないから、その替わり大人しくしろよ」

男はそっぽを向いた。どうやら彼女に乱暴を働く気はないらしい。

「あんた怖くないのか」

それは何に対しての問いだろう。誘拐されたことに対してか。だとしたら

「最初は怖かったわ。目覚めたら知らない場所で縛られて動けないし。でも、なぜかしら。今はあまり怖くない」

それよりも、お父様がもし迎えに来てくれなかったら…。  
見捨てられる方が怖い。

「誘拐したことを謝りはしない、ただあんたに乱暴を働く気はないんだ。だから、迎えが来るまでおとなしくしていてくれ、いいな？」

「そう、なの」

誘拐犯の言うことを真っ向からは信じられないが、男のことはほんの少し信じられる気がした。どうやら彼女に無理強いするつもりはないらしい。

だとしたら、なぜ誘拐などしたのだろうか？

この男に少し興味がわいた。

「あなたの名前は？」

「あなた変なお嬢様だな。誘拐犯の名前を聞くなんて…エリックだ」  
エリックは少し戸惑いながら言った。

「私はパトリアよ。変で悪かったわね」

再びエリックは蹴られることとなった。

メルーサ領を治めるのは代々クレイトン家だ。

現在の当主はフレデリック・クレイトン。パトリシアの父親だ。

彼は執務室で役人が作成した書類を見ていた。

領を統治するのが仕事だが殆どは役人が考え作成した書類に印を押す、変わり映えのない日々。

ふと、部屋の外が騒々しくなった。何事かと思うと同時にノックが聞こえ、

「失礼いたします旦那さま」

いつもは冷静な侍従が息を切らしあわてた様子で入ってきた。

「騒々しい。何かあったのか？」

「は、はい。実はお嬢様が」

「パトリシアがどうした？」

「攫われたのです！このような文が屋敷に投げ込まれました」

領主は侍従から手紙を奪い取ると、目を通し溜息をついた。

「ふむ、わかった」

「どうされますか？」

「他の者には話すな、内密に。あとシルヴィアを呼べ」

「かしこまりました」

侍従は礼をして出て行った。なんとということだ、パトリシアが誘拐されるとは。

文にはパトリシアを返してほしくば身代金を用意しろと書いてあり、その金額は莫大だ。おそらく一つの村が一生食べていけるほどだろう。領主の彼には用意できる金額だが、財産の殆どを失ってしまうほど巨額だ。

しばらくしてシルヴィアが訪れた。

シルヴィアは黒曜石のようだといわれている。

目も髪も黒く、ややつり目で整った顔立ちに艶やかな黒い髪を高く結び、胸元の開いたエメラルドグリーン<sup>①</sup>の妖艶なドレス、まるで占い師のような神秘的な姿だ。

領主は美しいシルヴィアに入れ込んでいるともつばらの噂である。血のつながった娘とはあまり会わず、シルヴィアと過ごすようになったからだ。

「おお、シルヴィアよ。もっと近くにおいで」

両手を開いてシルヴィアを歓迎し、ことの発端を話す。

「まあ！パアトリシアが攫われたですって？早く迎えに行かないと」

「だが文を読んだらう、あの子の代わりに全てを失うことになる。

お前はそれでもよいというのか？」

よく考えろと。

「でも…やはりパトリシアの命には代えられません。あなたもそういうお気持ちではありませんか？」

「そうか、おまえがそこまで言うなら迎えに行こう…」

「ええ、そうですね。早く迎えに行つてあげましょう」

とても嬉しそうにシルヴィアが微笑んだ。

「なかなかうまくいったな」エールで乾杯した後、男が口を開く。その場には男を含めて3人がいた。

「ああ、チヨ口いもんだな」

「ここまではね。明日が本番なんだから気を抜かないように」

「へいへい」

男の軽口に女が釘をさす。

明日は身代金を受けとる予定で、絶対にしくじるわけにはいかないのだ。

「それより、ちゃんと金は貰えるんだろうな？タダ働きで、はいおさらばってのは無しだぜ」

「どうやら女がリーダー格のようだ。」

「あたしがそんなに信用できない？前金は渡しているはずよ。それでも信じられないと？」

「いや、大金が手に入るんだ。なんか夢みたいで信じられなくてよ」

「報酬は全員で山分けよ。とにかく手筈通りに」

男二人は頷いた。

「しかしよお、あのお嬢様はやつぱりコレなのかい？」

男が親指で喉を切るような仕種をする。

「ええ。あの領主の娘は生かして帰さない」

女は冷徹にいい放った。

「そうだ、俺たちを苦しめた領主に罰を与えてやろうじゃないか」メルーサ領は高すぎる税金により、民が貧困に喘いでいた。

領内各地で暴動が起き、食べるものがない為飢え死にをする者もいた。そんな情勢にした領主を民は恨んでいる。

「でもよお、あの娘は関係無いんじゃないか？悪いのは父親の方だろう。まだ若いのに殺すなんてあんまりだ」

なぜそこまでするのかと。



「それも依頼の内よ。殺せないなら報酬は払わないわ」  
この誘拐は依頼されたものだ。しかもこのご時世に多額の報酬付きで。一も二もなく受けおつたはいいが、理由を知らないまま娘を殺さなければならぬ。

今まで生きるために殺しは何度かやった。しかし今回は相手が貴族でまだ子供だけに躊躇った。

「そうか。まあ娘の運がわるかったってことだな」

人質のいる小屋から仲間の所へ行く道の途中でふと立ち止まる。

あのお嬢様は何も食べていないし、もしかしたら腹を空かせているのではないか。後で何かをもっていつてやろう。

はじめは貴族らしく平民を見下すような態度をとられ、彼も苛ついた。しかし、話していると高飛車な所はあるが世間知らずと言うだけで別に嫌いではない。むしろ大人しさの欠片もない娘、という印象の方が強い。女性、というより少女と言える年齢のせいかもしれないが。エリックが想像していたお嬢様像とはかけ離れていた。今では少し好ましく思える。

彼女のじゃじゃ馬な性格に今はここにいない妹を思い出して、少し苦しくなった。

自分が何とかしてやらなければ。その一心でここまでできたのだから。

仲間の元へ戻るとなぜか居ないはずの人間の声が聞こえてきた。彼の仲間は二人の男だったはず。

なぜ女の声が？

つい立ち聞きしてしまった。

「あの娘は生かして帰さない」

あの娘とは、当然パトリシアの事だろう。

殺す？

そんな事は聞いていない。身代金を受け取ったら家に帰すのではないのか。自分の知らないところで恐ろしい会話がされていることにゾツとした。

意を決して壁の向こうをそっと伺う。

エリックは驚いた。

驚きで声を出さなかった自分を誉めてやりたいくらいだ。

声の主はあの大人しそうな侍女だった。

なぜあの侍女があそこにいる？

そして彼女、パトリシアを生かして返さないとはどういうことだろう。

自分の知らない所で話が進んでいて、それに思考が付いていけない。だが一つだけ確かのなのはここに居てはまずいということ。

エリックはそおつと壁から離れると、音を立てないようにその場を退いた。

建物を出るとふう、と一息ついた。

危なかった。

あのタイミングで出て行ったら間違いなく口を封じられていただろう。

なぜならエリックはそこまで聞かされておらず、つまりその先彼が知ってしまうとまずい話ということだ。

侍女の縄をほどいて小屋から連れていった時は、屋敷と連絡を取るためだとかつてに思い込んでいた。

しかし彼女が実行犯だったとは…。

それにあの侍女…かなり胡散臭い。

あの場に居た侍女は先ほどとは別人に見えた。

そしてあの顔は冷徹な犯罪者の顔だった。

出で立ち変わらず、眼鏡をかけ髪も三編みだったというのだ。

それに人質、パトリシアを殺すなんて…

エリックにとって誘拐するといっただけでもその精神的負担はかなり大きいのだ。

なのにその上人殺しをするなど到底無理な話だろう。

俺にはできない、人殺しなんて。

ならば…。

エリックは一つ決意すると、早速行動を起こした。

ああ、お腹すいた…。

悲しいことに先ほどから腹の虫が鳴いている。

目が覚めてからどれくらい時間がたったのだろう。

すっかり夕日は暮れてしまい窓から差し込む明かりは無く、暖炉で燃える薪の火が唯一の明かりだ。

暗い。せめてランプを点けてくれないかしら。

手を縛られているので何をしようでもないのだが、暗いというだけで不安が増殖する。

パトリシアは無性にポーを抱きしめたくなった。

ポーは彼女が小さなころから飼っている猫だ。

白くてまん丸でふわふわなポー。

さみしい時はいつもポーを抱きしめてその暖かな存在に癒されてきた。

早く家に帰りたい。

帰ったら暖かい紅茶を飲み、思う存分ポーを抱きしめよう。

ポーは苦しいと嫌がるだろうが。

大人しくできないところはどうぞやら飼い主に似たようだった。

外から足音が聞こえてきた。その足音はドアの前で止まり、

「入るぞ」

「ノックしてって言うてるじゃない」

「はいはい」

どこかの兄妹の会話かと思うようなやり取りをする。

エリックが小屋に入ってパトリシアの方を見ると、暗さに目が慣れ

ないのか、

「見えないな」

「その通りよ。暗いし寒いし、その上お腹減ったわ」

パトリシアは放って置かれたことに腹を立てている。普段なら何かと世話をやく侍女が今は居ないのだから当然のことかもしれない。

「悪かった。今明かりを点けるよ」

暖炉の火をランプに移すとぼんやりと少し暗めの明かりが小屋を照らす。

明るくなると互いの顔がはっきりと見える。

するとエリックは懐からナイフを取り出し、パトリシアに近づき

-

彼女の手を縛っている縄を解いた。

パトリシアはいきなり縄を解かれ訳が分からない、という顔。

「あんたを逃がすわけじゃないから。少し予定が変わったんだ」  
手をさすりつつ、訝しげにエリックの顔をみる。

「これから金と人質を交換する。もう少しの辛抱だから大人しくしてるんだ」

「えっ、家に帰れるの?」

嬉しそうな笑顔を浮かべ、エリックに詰め寄る。

「ま、そうだな。あんたが大人しくしてたらちゃんと帰れるだろうよ」

良かった。お父様が迎えに来てくれるのね!

パトリシアは自身が見捨てられなかった事に安堵と喜びを感じた。

そして家に帰れることで不安が払拭されたようで、彼女の目にはいきいきと輝きが戻っている。

そんなパトリシアの様子を見て、エリックは複雑な気持ちになった。彼女の喜ぶ姿が嬉しい反面、これから彼女を落胆させてしまう事を考えると辛かった。

「その前に何も食べてないだろ?これしかないけど、食べないよりはきつとマシだと思う」

そう言っただけでエリックはポケットからビスケット出した。

そのビスケットをじつと見つめて、

「何か入ってないでしょうね?」

確かにお腹は空いているけど、あやしいものに手を出す気にはなれない。先ほどまで眠らされていたのだから、余計だった。

「安心しろ、何も入ってイヤしないさ、ほら」

と言ってエリックは一枚自分の口に放り込んだ。

「なら食べてあげるわ」

「はいよ。まったく生意気だなあ」



ビスケットを食べ終えると少し元気が湧いてきた。ついでにお腹の虫も収まったようだ。

「なかなか気が利くのね。味はまあまあだったけど」

一応彼女なりに感謝の言葉を述べつもりだ。

うっかり平民に食べ物恵んでもらったことは、都合よく忘れることに決めた。

「・・・どういたしまして」

エリックは若干顔をひきつらせながら返事をした。

「じゃあ行こうか」

と言って明かりを持たずに出ていこうとするので引き留めた。

「ランプは？」

外は暗い上に、パトリシアはヒールの細い靴を履いているので足元が不安定で歩きにくい。

「いや、すぐそこだよ」

パトリシアは疑問に思う間も与えられず、エリックに手を掴まれて小屋を出た。

「ちよつと」

不満そうに声を荒げかけたが、

「静かに」

その瞬間・・・

パトリシアはエリックに引き寄せられる。

そして顎をつかまれて上向かされ、

かなり近い距離で彼と目が合った。

訳も分らず抱き寄せられてパトリシアは全く反応ができないでいる。

「できないなら口、塞ぐよ？」

「なっ」

思いもしない距離から慣れないセリフを言われたパトリシアは、顔を真っ赤にして呆然とする。  
それと同時に急に鼓動が早くなっていく。

彼はパトリシアにニヤリと笑うとまた彼女の手を引いて歩きだした。

本当にキスされるかと思った…。もう訳が分からないわ！

パトリシアは心の中で叫ぶだけで、声に出しては言えないでいた。先程エリックにいきなり引き寄せられて驚いたのと、何か言い返したら口を塞がれるのではと警戒しているからだ。

あとで問い詰めてやらなきゃ気がすまないわ。

納得がいかず腹を立てていると、手を引かれいつの間にか山の中を歩いていた。

辺りは暗い。つい先程いた小屋とは違い先には闇が広がり、細い山道には草木が生茂っている。

フクロウが恐ろしげな声で鳴いて、パトリシアは思わず足がすくむ。それをエリックに知られたくなくて誤魔化そうとして言った。

「手を離して」

「痛いかな？」

前に行く背中がちらと振り返る。

「痛くないけど、いいから離してちょうだい」

「…まだ駄目だ。もう少し我慢してくれ」

エリックが何を考えているのか分からない。手を引くのは逃げられない為だろうか。

その心配なら必要ないのに。

「私が逃げられないようにしているの？それなら大丈夫よ。大人しく迎えを待って言ったじゃない」

すると落ち着かなそうに辺りを確認してからエリックが口を開く。

「そういうことじゃない」

「じゃあどうしてなの？」

エリックは、何でこのお嬢様は大人しくできないんだと呟いてから本当のことを打ち明けた。

「パトリシア。あんたはどうやら命を狙われているみたいだ」  
エリックは結局パトリシアを助けることを選択した。

明かりが欲しいというパトリシアを無視したのは、外を歩く姿を見られたら侍女達に不審に思われるからだ。

彼女を引き寄せたときも声を荒げた彼女を黙らせる為に必死だったし、小屋を出たことをあの侍女たちに見つからないようにとかなり焦っていたのだ。

そんな苦勞も知らないパトリシアは、エリックの言葉を信じなかった。

「まさか！冗談はよしてよ。私を殺してしまったら身代金と交換できないじゃない」

確かに彼女の言うことは正論だ。

しかしエリックははつきりと彼女を殺す計画を聞いてしまった。そのことをどうにか分かってもらおうとするが、彼女は聞く耳を持たない。

「そう、わかったわ。でも例えそうだったとしてもあなたは信用できない。だって誘拐犯ですもの」

パトリシアは悲しげな表情でエリックに言う。

「クレイトン家の侍女が誘拐犯の仲間で、私を殺そうとしているだなんてありえないわ！」

あの、いつもマイペーでぼんやりとした侍女が誘拐なんてできる訳がない。それにエミリーは3年もクレイトン家で働いていて、おかしな素振りは一度も見たことがない。失敗は多いがまじめに働いているのだ。

そんなことを言うエリックの顔を見たくない、そう思うとパトリシアは山道を走り出してしまっていた。

二人が逃げ出す少し前の事。

領主の館では日が暮れると篝火かがりびが焚かれる。いつもは門の脇や入り口、庭など数ヶ所だか、今日はその倍以上の火が焚かれていた。まるで祭りでもやるみたいだ、と一人門番をしながらマリスは思う。今まで賊が攻めてきたこともなく、平和に過ごしている。それは彼にとってありがたい事だ。

しかし、今日のように特に理由も知らされずに篝火が増えるのは不気味だった。

これは何かあるな。

クレイトン家門番の仕事をするようになって5年。経験上の勘が告げていた。

最近伸ばし始めた顎髭をなでながら思いふけていると、遠くの方から馬車らしき音が聞こえてきた。

暗闇の中、目を凝らして見ていると、一頭の箱形馬車が門を目指して向かって来ているようだ。しかもよほど慌てているのか、かなり速いスピードで近づいてくる。

マリスは手を振って馬車を止め、御者の男に話しかけた。

「今日はずいぶん遅かったな」

馬車はクレイトン家のもので、おそらくお嬢様を乗せているのだろう。陽が暮れる前に帰れずに焦っているのか。

すると御者の男はマリスに掴みかかる勢いで告げた。

「たっ、大変だ！」

「一体どうしたんだ？」

「お嬢様が拐われたんだ！」

お嬢様が誘拐された。

御者によると、町から屋敷へと戻る途中で数人の男たちに襲撃さ

れたのだという。彼が殴られて意識を失っている間に、お嬢様と侍女の姿が消えていた。

「とにかく侍従殿へ知らせなければ」

御者はそう言くと、説明もそこそこに慌てて走り出す。

偉いことになったな。

マリスは自分の勘が当たっていたことに關心し、同時に世間話のネタが増えたと内心ほくそ笑えんだ。

かくして、お嬢様誘拐事件は館の使用人ほぼ全員が知ることになったのである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8989p/>

---

お嬢様と誘拐犯

2011年2月5日13時10分発行